様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　3 月　29 日現在

機関番号：12501
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008 年度～2010 年度
課題番号：20520008
研究課題名（和文）　フロネーシスとミメーシス

研究課題名（英文）　Phronesis and Mimesis

研究代表者
加茂　英臣（KAMO HIDEOMI）
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：20114267

研究成果の概要（和文）：古代ギリシア哲学の中心概念のひとつ、行為を導く知〈フロネーシス：思慮・賢慮〉がどういうものであるかを、プラトンとアリストテレスとの対比を通じて浮き彫りにすることができた。その一番重要な局面を挙げれば、まずはそれが〈正義〉の実現を目指す知であるということにある。そしてその目指す〈正義〉とはそれ自体として意味のある価値であり、他のなにかほかのものに役立つから意味があるものなのではない。〈フロネーシス〉は自体的価値を目指し、功利主義的行動原理(プルーデンス)とは背反するものである

研究成果の概要（英文）：The main theme of this project is to make clear the concept of phronesis, which, the ancient greek philosophers like Plato and Aristotle thought, is to lead the human ethical conducts. The most important phase of this ancient practical reasoning 'phronesis' converges into the realization of the 'justice' for the sake of its own, against the instrumental or utilitarian 'justice' which is proper to the function of the modern practical reasoning 'prudence'.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学（哲学・倫理学）
キーワード：フロネーシス・ミメーシス・プレオネクシア・ヘクシス・デュナミス

1．研究開始当初の背景

(1)「フロネーシスとミメーシス」という課題を掲げた本研究の開始当初の全体的構想と問題設定は、先ずはアリストテレスやプラトン固有の〈思慮(フロネーシス)〉概念の非功利主義的本質を洗い出し、できればこの古代概念と、その近代的後継者である〈プルーデンス〉という功利主義的概念との対照的相違を確認・確定するということであった。それは 2006 年度ころより背景において既に開始されていた作業である。

(2)　さらに、上の〈フロネーシス〉概念を明らかにするためには、それと連動している諸

連関概念の解明が同時に必要である。そのような概念として、欲望・プレオネクシア(貪欲という無知)・ミメーシス(模倣)・悲劇・アテネ民主制・正義/不正義・習熟・ヘクシス等が分析対象となるだろうことが予測された。

2．研究の目的

〈欲望〉とそれを制御し導く行為の知〈フロネーシス〉との相関関係、この古代ギリシア発祥の相関概念を近現代の政治・法的歴史意識をも繰込んで総合的に分析することが研究の主要目的である。というのは〈より多く(を)－取ること：pleon-exia〉という欲望の古代概念が、そのままにホッブズ・ミル、そしてニーチェ・マルクスに継承されていることの歴史的意味の解明は非常に大きな意味をもつ作業である。

また、この自体的価値を目指す〈フロネーシス〉が〈プルーデンス〉という訳語に移されて功利主義的に解されて逆説的な仕方で近・現代に引き継がれたという奇妙な事態が存在する。この事態の解明は手つかずのまま放置された感があり、このテーマも重要な研究目標として追及する。

3．研究の方法

方法としては、プラトン・アリストテレスのテキスト読解を先ずはしっかりと中心軸に据えておく。それをアテネ民主制という歴史的観点から読み解き、またそのテキストとホメロス・悲劇詩人、ヘロドトスやトゥキュディデス等の詩人や歴史家との連関を問い、さらにはホッブズやミル、ニーチェやマルクス、そしてドゥ・ローミー、ロールズら古代・近代・現代の哲学者や歴史家の知見と交差させてみる。このようなテキスト読解の精査眼と、歴史的な視点を交差させて、事柄・問題をあらためて再構成するという複眼的手法を選択した。

4．研究成果

(1)今回の研究成果は、そのすべてが著書『欲望論－プラトンとアリストテレス』(晃洋書房、2011.01)に結集されているので、同書の章立てに従ってその成果を以下に論述する。

ソクラテス、プラトン、アリストテレスが「よく生きる」という意味でひとの〈幸福(eudaimonia)〉をテーマにしたことはよく知られている。本研究はこの「よく生きる(eu zēn)」ための〈知〈フロネーシス〉〉を中心にした問題群を論考の主題にしている。ただしこのテーマへ接近する道筋は、この〈フロネーシス〉を幻惑する欲望という裏の通路を辿らなくてはならない。そういう意味で〈フロネーシス〉論は同時に「欲望論」でもある。

B.C.5 世紀末の古代ギリシアの政治状況に固有な〈プレオネクシア〉という欲望概念がある。プラトンとアリストテレスの欲望論もこの術語を共有している。この欲望論のプラトンとアリストテレス理論における位置づけ・意味づけを具体的にテキストに即して考察する。〈プレオネクシア〉とは、〈限度を超えて、より多く(を)－取る(pleon-echein)〉という複合動詞を名詞化したものである。この語の即物的な合成語は、一語に熟させるのが困難なため〈貪欲(greed, Geiz)〉と訳されるのが普通であるが、この語のもとの意味の把握なしには、この欲望語の持つ力学がわからない。この語は、ミル的にいえば、一方で自分だけにかかわる(self-regarding)自己中毒的な獲得欲望癖を意味し、他方では自己を超えて他者危害にも及ぶ不正な獲得欲望性向として〈不正義〉とみなされるが、両者とも悪徳、欲望の病として両哲学者によって興味深い分析が加えられている。

この概念は、近代の初期においてはホッブズが自然権のモデルとして引用した。またニーチェがプラトンの『ゴルギアス』に登場するカリクレスの言より〈より多くへの－意志〉として自分の「権力意志論」の駆動概念としたことはよく知られている。さらにアリストテレスの『政治学』第一巻の〈家政術(オイコノミケー)〉の分析箇所の精査の作業から、この〈より多く(を)－取る欲望〉の概念を、マルクスが〈Mehr-wert:より多くの価値〉(剰余価値と訳される)、〈資本の限度なしの自己増殖〉の概念形成のために援用していることは間違いないだろう。本書の欲望論の試みを通じて、〈獲得・所有〉と〈配分・分与〉の対立の構図が、古代ギリシアから近代、現代にいたるまで何度も繰り返して回帰することをあらためて確認した。

(2) 第一章「遇運と行為－フロネーシス」は、アリストテレスの幸福概念が、3 種類の要素から成り立っていることを示した。快と外的善とよく生きる性向の三つの要素である。特にアリストテレスはプラトンと異なって、外的条件に適度に恵まれなければ、いくらよく生きるという性向をもつひとでも、よく生きる活動を妨げられて幸福ではなくなる可能性を説いた。遇運(外的善)への受傷性(vulnerability)というまなざしがアリストテレスの幸福概念には不可欠である。そのような視点から書かれたヌスバウムの著書『善き生の崩れやすさ』に促されて外的善とよく生きることとの関係を、アリストテレスがそのような視点をそこから受容したとされる悲劇に焦点をあてて論述した。

(3)　第二章「僭主の夢－ミメーシス」は、プラトンの『国家』篇を欲望とミメーシス(真似る)という見地から見通してみる試みである。寡頭制、民主制、僭主制の三体制は、すべて欲望が首座に立つ体制である。中でも民主制下にあるデーモスは真似ごと=劇(悲劇)の公的鑑賞欲望を通して、自己の〈不必要な欲望〉を満たし自己形成する。僭主は、〈不法な欲望を満たす夢〉によって自己形成する。それぞれ贅沢な夢、不法な夢を見ながら生きていく欲望族の輩である。

夢はその意味で危うさに満ちた最大のミメーシスである。夢という劇を見て生きる僭主は〈劣悪〉の極みであり、悲劇という夢を見て生きるデーモス大衆という生みの親(民主制)を殺して自らの地位を貪る。他者の犠牲上に〈より多くを取る貪婪：プレオネクシア〉という僭主の不正・不法には限度というものがない。父親殺しや近親相姦などのテーマを好んで再現するギリシア悲劇は僭主の夢の産みの親である。デーモスの不必要なプレオネクシアと僭主の不法なプレオネクシア欲望は、悲劇と夢のそれぞれのミメーシス欲望の発現に他ならない。

(4)　第三章「習熟による欲望の変貌－ヘクシスとフロネーシス」は行為の反復をとおした〈よき性向(ヘクシス)〉の習熟獲得をテーマにしている。アリストテレスの語るヘクシスとは、前ロゴス的な欲望の性向/習性である。それにはよいヘクシスと悪いヘクシスがあり、よいほうを徳・器量といい、悪いほうを悪徳という。ロゴスの使い手であるフロネーシスがロゴスを駆使して行為の基準〈中間：適度〉を構想するのに対して、ロゴス以前の欲望はこのロゴスの構想に習熟あるいはミメーシスによって協和する能力を持つといわれる。欲望のヘクシスがロゴスに〈協和できる〉ことの意味を探った。

(5)　第四章「プレオネクシアとメテクシス－自然の正義とゼウスの正義」は無知による悪徳、〈自分の取り分を「より多く獲って」他者を凌駕する〉自然欲望、〈プレオネクシア〉の歴史的分析である。〈プレオネクシア〉とはプラトンの『国家』篇のキーワードであるが、B.C.五世紀末のアテネでこの新思潮(無際限の獲得)が伝統的なメテクシス(分与・配分)の社会を席巻した。〈自然の正義〉が〈ゼウスの正義〉を席巻したのである。この両者の関係に、ヘロドトスとトゥキュディデスの『歴史』記述を媒介させて歴史的に具体的な肉付けを与え、プラトンの欲望論を新たに検討しなおす。その意味において、この章は〈プレオネクシア〉というB.C.5世紀後半のアテネをめぐる歴史的現象を洗い出す作業ともなっている。

(6)　第五章「悲劇－プラトンとアリストテレス」は悲劇にかんするアリストテレスとプラトンの間の決定的な亀裂点を『国家』篇のテキストに即して確認する論述となっている。

この論述は、〈幸福：eudaimonia〉の対立概念として使われる〈athlios:劣悪・惨め〉の概念の分析を通じて行われる。プラトンは、邪悪なひとだけではなく、邪まではないが軟弱な悲劇の主人公、それを鑑賞して涙を流すような崩れやすい性格のひと(すなわちアテネ民主制下の市民たち)、これらの人柄をすべて〈劣悪で惨め:athlios〉なひととして蔑もうとする。

これに対して、アリストテレスは一方で劣悪・邪悪なひとをプラトン同様（athlios）として蔑むのであるが、他方悲劇の主人公のような遇運にもてあそばれて崩れる不幸な善きひとを〈憐れで同情に値する〉という意味で〈athlios〉と呼ぶ。

プラトンにとっては、このようなひとはそもそも善きひとではなく、すでに劣悪なひと（athlios）なのである。ただ劣悪度が邪悪なひとより軽いのである。

悲劇の見地を受容したアリストテレスは〈athlios〉を〈劣悪〉と〈憐れ〉の二義に用いて、前者は侮蔑するが後者は同情に値するものとみなす。プラトンは〈邪悪〉とともに〈憐れ〉をも劣悪の種類に一元化し〈athlios〉として軽蔑する。プラトンの〈athlios〉のこの一義性をアリストテレスにも無理やり継承させようとするアーウィンの議論には無理があり誤りである。アリストテレスの〈athlios〉は二義的である。

(7)　第六章「家政術(oikonomia)と商いの術(kapēlikē)：フロネーシスとプレオネクシア」は、家政の長(oikonomos)が、家長の賢慮(phronēsis)としての〈家政術〉を〈商いの術〉と錯視して貨幣の蓄蔵悪癖に退廃する筋道を『政治学』第一巻のテキストから引き出す作業を試みる。

同時にアリストテレスが、自分だけにかんする〈より多くを取る〉所有欲望の悪癖と、他者危害に及ぶ〈他人の犠牲のうえに自分の取り分をより多く取る〉という不正義性向との、二種類の〈プレオネクシア〉を分類していることを確認する。これを筆者は内的プレオネクシア、外的プレオネクシアと呼び分けた。アリストテレスは家長の貨幣蓄蔵を家長

の心理という見地から内的プレオネクシアとして分析している。しかし外的な見方をとれば、主観的プレオネクシアは他人に正当に属する配分を不当に自分の獲得物にしようとする不正義として、すでにして外的プレオネクシアとなっている場合が多い。家長の貨幣蓄蔵の場合もこの例にもれない。

『政治学』ではこの内的プレオネクシアの分析から第五巻にいたって、アリストテレスは、利害や名誉の配分をめぐって相互に〈相手の不正義〉を掲げた、階級政争を具体的に分析し、それに対する政治的指針や調停案を提案し、さらに国制自体の在り方を分析することになる。

(8) 以上が論述形式による積極的な成果である。さらに、この研究課題は、プラトン・アリストテレスのテキストに連関してアテネ民主政に固有な制度の図像的解明を掲げていた。そのような図像にかんしては、アテネ、ウィーン、ベルリン、ロンドン等の美術館や博物館で、饗宴やパンアテナイア祭にまつわる多くの壺絵をデジタル画像として収集した。しかしながらこれを編集して刊行物に完成するまでには至らなかった。

とはいえ、著書『欲望論－プラトンとアリストテレス－』のカヴァーに載せた重層歩兵に扮するアテナ像はその成果の一端を示している。これは、パンアテナイア祭の優勝者にオリーヴオイルを満たして与えられた壺(アンフォラ)に描かれた興味深い貴重な図像である。アテナが掲げる盾に描きこまれた二人の男の姿は、僭主殺しの英雄達である。これは、アテネ民主政がその様にしてまでも〈僭主〉という暴君を制度的に嫌った共和の象徴なのである。

5．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 加茂英臣、プレオネクシアとメテクシス－自然の正義とゼウスの正義－、千葉大学教育学部紀要、査読無、第 58 巻、2010、287-304
② 加茂英臣、習熟による欲望の変貌－ヘクシスとフロネーシス－、千葉大学教育学部紀要、査読無、第 57 巻、2009、261－274
③ 加茂英臣、僭主の夢、千葉大学教育学部紀要、査読無、第 56 巻、2008、267-286

〔図書〕（計 1 件）

① 加茂英臣、欲望論－プラトンとアリストテレス－、晃洋書房、2011、314

6．研究組織
(1)研究代表者
加茂　英臣（KAMO HIDEOMI）
千葉大学・教育学部・教授
研究者番号：20114267